

寄稿文

本記事は、平成 27 年 1 月に実施したインタビュー内容を取りまとめたものです。

「新しき都、美しき国」

作家

高嶋 哲夫 氏



- ▶ 首都機能移転をテーマとした「首都崩壊」を書くことにしたきっかけ
- ▶ 阪神・淡路大震災の際の被災体験
- ▶ 震災を伝承していく
- ▶ 東日本大震災への対応
- ▶ 政府の危機管理体制について
- ▶ 首都機能移転や今後の首都のあり方について
- ▶ 高嶋哲夫氏 プロフィール

首都機能移転をテーマとした「首都崩壊」を書くことにしたきっかけ

もう 20 年以上前になりますが、首都機能移転というのが盛り上がった時に「首都移転」というタイトルで小説を書きたいと思って、新聞記事などの資料を当時から集めていたんです。ただ、その時はやはり現実感がなかったというか、どう書いて良いかというのがわからなくて、ずっと放っておいたんです。

しかし、その後阪神・淡路大震災、東日本大震災が起こって、地方分権ということも言われ始めたときに割と現実感が出てきて、「こういう形であれば書けるかな」というイメージがわいてきたので、「首都移転」というタイトルで書きました。出版する際に、出版社からタイトルは「首都崩壊」のほうが良いと言われて「首都崩壊」となったんです。もともと、「首都移転」については、首都「機能」移転とは僕は考えていなかったんですけども、とにかく遷都もアリかな、面白いなというきっかけがあったわけです。

阪神・淡路大震災の際の被災体験

阪神・淡路大震災のときに、僕は神戸の垂水という所に住んでいました。非常に大きな揺れで目を覚ました訳ですが、あれである意味、人生観が変わったというんでしょうか。「こういうことも起こり得るんだ」と思いました。

阪神・淡路大震災が起こるまでは、僕は地震なんて考えたことも、興味もなかったです。出身は岡山県ですが、岡山県は非常に温暖なところで、大きな地震もないし、台風も直撃しません。ですから、東京に出て一番驚いたの

は雨が多いことや地震も多いことです。神戸と岡山は近いので、実際に神戸で自分がああいう大きな地震を経験するとは思いませんでした。

神戸は山と海に挟まれた細長い地域です。そのような狭い場所で6,400名以上の方が亡くなったというのは、どこを掘っても遺体が出てきたような大惨事でした。僕の友達では亡くなった方はいませんでしたが、親戚が亡くなった方とか、家が完全に潰れた方がいました。友達の1人とずっと連絡が取れなくて、地震から1週間後ぐらいに、国道2号線の封鎖が解除になって、長田とか三宮を見ながら東灘まで車で行きました。途中は実にひどい状況でした。これはどうしても残しておかなければだめだと思って、そこから資料を集めて勉強を始めました。

ですが、すぐには書けませんでした。神戸の人に「あのときは？」と聞くと必ず何らかの形で関係しています。家族や友達が亡くなったり、家が全壊・半壊したとかですね。亡くなった方の家族、友達が読んで、納得してくれるような本でなければならぬ、と思ってずっと資料を調べたり、話を聞いていました。どういう形で書けば良いかわからないうちに、9年が経っていましたが、出版社の方には「書きたい」と言っていたんです。

そして、阪神・淡路大震災から9年目に出版社の方から、10年目には震災のセレモニーもあるだろうから、今しか書くチャンスはないですよ、と言われて、書きあげたのが「M8」(エムエイト)です。神戸を舞台にするのはちょっとしんどかったので、神戸で被災した3人の高校生の10年後を書きました。3人がそれぞれの思いを持って東京に出て、そこでまた、東京直下型の地震に遭遇する。

それまで地震等には興味なかったのですが、調べるとかなり本や政府の資料は出ているんですね。それを読んでいるうちに、東京はとにかく危ないと感じました。使っているデータは政府や東京都が出しているものです。

震災を伝承していく

出版社の編集者は、作家と並行して資料を読んで、一緒に勉強していくのですが、「M8」を書き終わって、打ち上げをしているときに、次をやりましょうよという話が編集者から出てきたんです。少し調べると地震の次は津波ということはわかりきっているので「ああ、津波ですか」となりました。ある意味、科学ですね。「M8」を書いたとき、僕は東京都と国の資料をかなり読んだのだけれど、被害想定が非常にいいかげんに感じられ、こんなものではないだろうと思いました。おそらく関東大震災での被害を参考にして書いているのだろうと思いました。というのは、交通関係の被害を、ほとんど取り入れていなかったのです。なので、今発生すれば、被害はもっと大きくなるだろうと思い、単行本の第5刷か6刷くらいで、書き直しました。国が都かの被害想定は「1万人前後」だったのですが増やしたんです。「TSUNAMI」を書いている年の12月、インド洋の大津波が起こり、22万人以上という非常に多くの人が亡くなりました。日本でも十分にありえると思いました。

東日本大震災前に今村文彦先生(当時東北大学大学院工学研究科附属災害制御研究センター教授、平成24年4月より東北大学災害科学国際研究所教授)と対談したときに、彼の研究室に小学生の絵がいっぱいかかっていました。それを見た時には、大学院の教授の部屋にこれはないだろうと正直思ったのですが、「これは避難マップと言って、このあたりの人は意識が非常に高い。宮城県沖地震というのは99%の確率で起こる。」と先生がおっしゃっていたのを聞いて、すごいな、と思っていたら、その数年後に、東日本大震災が起こってしまいました。

僕が「TSUNAMI」で書いたのは、東海・東南海・南海地震を起こす南海トラフの崩壊ですが、巨大地震と津波の後に起こることは同じようなことです。ほぼ網羅されていると思っています。だから東日本大震災の前に、もっと多くの人に読んでいただいていたら被害が多少は少なくなったかなと思います。「想定外」ということがよく言われましたが、想定できないこともないと思うのですけどね。この大震災では2万人弱の方が亡くなりました。

東日本大震災に関する著書は「ライジング・ロード」、「震災キャラバン」ですが、「M8」を書こうと思ってから20年余り勉強してきて、日本というのは地震を含めて自然災害に怖いところだというのがすごく印象に残りました。いずれ巨大地震が起こることはわかっていました。東日本大震災にしても、宮城県沖地震は99%の確率で起こるというように科学的には検証されていました。それをどれだけ本気に捉えていたかということです。捉えた人もいるのだろうけども、残念ながら捉え方が甘かったということなんでしょうね。

僕にできることは、書いて、未来の人に伝承することです。それが僕はすごく大事なことだと思うのです。伝承プラス、できればシミュレーション的に、こういうことが起こるということ、読んで知っておいてもらうことがとても大事です。「TSUNAMI」を書いた直後も、「これはちょっと大袈裟すぎる」と言う人も結構いました。でも実際に起こってしまいました。

東日本大震災への対応

この話になると、政府への悪口になってしまいますが、はっきり言って勉強不足だと思います。

東日本大震災の対応は、僕は非常にまずかったと思います。まず1つ目は阪神・淡路大震災の教訓がほとんど活かされなかったことです。瓦礫問題、仮設住宅にしても、その後の住宅問題にしても、仕事・企業の問題にしても、1つの雛型は阪神・淡路大震災で既にできています。巨大災害のベースになることは、「迅速に、公平に」ということです。阪神・淡路大震災で初めて経験していろいろと試行錯誤したことが、東日本大震災でまるっきり活かしていません。同じことを同じように時間をかけて議論して間違いを繰り返してしまいました。「愚政は人を殺す」というのは本当だなと痛感しました。

復旧復興の計画も非常にまずかった。ああいう大震災の対応で、一番大事なのは原状復帰です。僕は、震災から半年後に気仙沼に行きましたが、一番驚いたのは人がいないということです。だれもいなくて、瓦礫が積み上げられていて、たまに何人かの人々が瓦礫の片付けをやっていました。阪神・淡路大震災の時は、半年後は人があふれていました。それを都市型と広域災害との違いだと言った大臣がいましたが大間違いです。とにかく原状復帰して、後は適正な補助金を出して、民間に任せれば良いと思います。しかし、高台移転とか、土地のかさ上げ、同程度の津波に耐える堤防を造るとか、壮大な計画を立て、政府もそれを後押ししています。

次に同規模のM9の災害が来るのはいつかということ、早くて600年後なんです。歴史的にみたら1000年後とも言われています。600年後の心配をしても未来の人は喜んでくれません。一番大事なのは、今、生きている人。その人たちが早く元の生活に戻ることです。

高台などへコミュニティごとまとめて移転するなんてことは、非常にむづかしい。コミュニティを崩すなど言うことは、神戸で十分経験しています。それにも関わらず同じようなことをやって、3年経っても復興にはほど遠い状況です。高台移転しても50年、100年経ったら、また元に戻ります。やっぱり海にかかわる仕事だと海辺は便利でしょうからね。そういった基本的なことをまるっきり捉えていないのが、東日本大震災後の対応だと思います。

また、『TSUNAMI』の出版後に、宝島社から「巨大地震の後に襲ってきたこと！」というムックを出しました。これは良い本だと思っています。阪神・淡路大震災後のトラブルについて書いている本です。住宅再建、土地の権利関係、マンション補修といった話です。東日本大震災が起こったときに、出版社から「もう1回出したい。大きな変更があれば修正してほしい。」と言われて、調べたのですが、変更はほとんどありませんでした。数行追記して出版しました。

何年後には、東京直下型地震や南海トラフ地震が必ず起こります。

まずやっておかねばならないのは、法的整備でしょう。状況に応じて瓦礫を自由に片付けていいとか、義援金の分配方法とか、生命保険、火災保険、地震保険などです。さらに、言い難いことですが遺体の安置や火葬、埋葬等です。『TSUNAMI』には少し書いています。

現行法ではすごく制約があるんですね。もし限られた区域で万を超す死者が出たら、公園や校庭で焼却する必要が出るかもしれません。

それと、東日本大震災では民家に突っ込んだ車を勝手に移動して良いのかどうかなど、細かいことがありましたね。現在はおそらく対応できているでしょうが、そういうことで、実際の復旧復興が滞らないように法的整備は今のうちに整えておくべきです。実際に事が起こった時にはスムーズにいくようにしておきたいです。

それと住宅問題があります。神戸のときにも、被災者の土地から離れた場所に仮設住宅をたくさん建てました。1戸つくるのに何百万もかかって、撤去費用もかかる中で、何故それを被災者の土地に建てられないのかと思います。それぐらいの法律の整備があっても良いのではないのでしょうか。自分の土地があったらそこに建てて、被災者が望めばあげてしまえば良いと思います。撤去後の仮設住宅も結局神戸は半分ぐらいを海外に災害援助であげてしまって、残りはどうなったか知りません。だったら、初めから被災者にあげてしまえばいい、お年寄りや2軒合わせてそこに住んでも良いのではないかと思います。仮設住宅をわざわざ建てる必要があるのかについても神戸で問題になりました。空き家を借り上げてそこに入ってもらい、あとは自力での復興を促す。

災害に対する備えの重要性とそれに対する国民の意識の向上は、さらに必要だと思います。日本は、一般に考えているよりはるかに危険なところなんです。地震もある、津波もある、火山の噴火も出てくるでしょう。台風は毎年必ずきます。そういう意識を持って覚悟して住まなくてはだめな国です。

備えで重要なのは、やはり知ること。災害というのはこういうことが起こるということを知っておくことが一番大事だと思います。現実には一人ひとりにどういうことが起こるかわからない。でも災害に対する知識があり、起こり得ることを知っておけば、臨機応変な対応ができるということです。

原発事故については、福島第一原発と日本の他の原発とを同様に考えることは間違っていると思います。津波が高かったということもあったし、耐用年数を過ぎていたということもあります。アメリカ仕様のフルターンキー契約（プラントのかぎを回しさえすれば稼働できる状態で引き渡す）だったし、古くて手元に図面すらなかったとも聞きました。運転開始から40年経てば、製造当時の人も退職して、既にいません。そういうことを含めて、耐用年数どおり40年で運転を止めておくべきでした。女川も津波の状況は非常に似ているけれども、冷温停止後は避難所になっています。例えば浜岡原子力発電所も、5号機は2005年にできた新しいもののなのに、なぜあれを止めたのかわかりません。あれを止めれば国民が納得するだろうと思ったのでしょうか。

福島第一原発はアメリカ製で、竜巻対策を考えて作られているので、電気系統を全部地下に入れていたことから、津波で電源喪失してしまいました。日本の発想とは違うもので造っていたということです。浜岡は日本人が造っているの、色々な対策をやっていると思います。

福島第一原発の事故について、多くの人は人災だと言います。そうであれば事故の責任は原発自体より人にあるはずです。

原発は事故時には、「止める」「冷やす」「閉じ込める」で安全性が保たれます。まず津波に襲われたすべての原発は、止まりました。次に冷やすことに入りましたが、福島第一原発だけが失敗しました。そして放射性物資を閉じ込めることにも失敗しました。

全電源喪失という事態が起こり冷却水がなくなり、炉心の温度が上昇しメルトダウンに至ったわけです。ということは、全電源喪失が防げていればこのような事故は起こらなかったということができます。

事故後、日本中の原発が行なったことは予備電源の強化です。数を増やし高台にも設置しました。さらには電源車も整備しました。

巨大な堤防を造るより、電源の確保を確かなものにしておく方が合理的だと思います。

政府の危機管理体制について

日本は地震、津波、台風、集中豪雨、大雪など自然災害が頻発します。

多くの日本人は自然災害は自分には起こらないと考え、防災、減災に対する費用は保険と考えてきました。しかし二つの大震災を経験して、やっとそれは甘いと考えるようになったようです。

台風、大雪などは毎年必ずやってきます。

地震や津波も日本に住む限り必ずやってきます。そうであれば、毎年必ず生じる必要経費と考えるべきです。

アメリカのFEMA（合衆国連邦緊急事態管理庁、Federal Emergency Management Agency）のような組織が日本にも必要であると思います。日本にはしっかりした予算規模を持って自然災害に立ち向かう実働部隊を備えた機関がないですね。日本の防災担当大臣は普段何をやっているのでしょうかね。

首都機能移転や今後の首都のあり方について

これまでの「首都機能移転」に関する政府・国会の動き、これは到底本気とは思われません。「首都崩壊」にも書いた通り、首都を移転するとなったら東京都民は怒るだろうし、横浜、千葉など首都圏は大反対するでしょうね。そこから出ている国会議員を含めたすべての政治家も反対するでしょう。指導力のある強力な政府であれば、機能移転程度は実現できるかもしれません。

日本が地震や火山、台風といった自然災害の塊のような国だということは言いましたよね。

阪神・淡路大震災、東日本大震災といった大きな災害から何とか立ち直りつつあるのは、司令塔のある首都東京がダメージを受けていないからです。政府のある東京が崩壊したら被災地ばかりでなく、日本中がパニックです。

でも、現在は東京直下型地震が現実味を帯びています。

東京が大きな被害を受けたら、その影響は日本だけじゃなくて世界に広まるんじゃないか、という発想で『首都崩壊』を書きました。

そのためには司令塔となる政府のある首都は、もっと自然災害のない安全な場所に移した方がいいということです。

また現在、東京一極集中が問題になっています。これは地方に住んでいるとよく分かります。これを改善するもっとも簡単で早い方法が首都移転だと思います。

『首都崩壊』を書くときに調べたら、東京を首都と定める明確な法的根拠はなかったような気がします。当時は地理的にも政治的にも中心だったからでしょう。

でも現在は、江戸や明治の時代と比べて交通網は陸、海、空を含めて想像を絶するほど進歩しています。日本のそれなりの都市からだ、と、日帰りで行き来できます。僕の住んでいる神戸から東京まで、飛行機だと一時間とちょっとで来ることができます。

それに通信も、インターネットを使えばリアルタイムで日本はおろか、世界中の複数の人と繋がります。テレビ会議も普通にやっつてるでしょう。

交通と通信だけを考えれば、首都が地理的に日本の中央にある必要性も薄れています。

現在の科学技術の状況で、首都の姿を考えることも重要だと思います。

首都移転を考えると、同時に考えなきゃならないことに「道州制」があります。

現在の「都道府県」は江戸から明治に変わった百五十年あまり前の姿を踏襲しているにすぎないでしょう。「戦後レジームからの脱却」とよく言われますが、「明治レジームからの脱却」ですね。

これは真剣に考えないと世界の流れに乗り遅れます。

地方がそれなりに発展するためには、ある程度の規模がなきゃ駄目だと思います。

現在の大都市といえば、東京、名古屋、大阪程度でしょうか。日本中にもっと核になる特徴を持った都市がほしいですね。

アメリカで言えば、ワシントンとニューヨークはそれぞれ政治と経済、文化の中心という住み分けができています。さらに、シカゴやロサンゼルスもあります。

まず、すべてのしがらみをなくして、白紙の日本地図を頭に描く。

そして、理想の日本の区分けというか姿を描き入れていく。そうすると、おそらく今とはまったく違った日本の姿が見えて来るのではないですか。

「道州制」が進むと、首都のあり方も必然的に違って来るんじゃないですか。

地方に活力が出てそれぞれの自治性が強くなると、中央政府の役割が明確になります。

政府は、国全体のあり方とか、方向性の決定とか、国防とか、外交とか、国でしかやれないことをやる。地方のことは当事者である地方に責任を持って任せる。現在は人材も各地に大勢いるし、手段もあると思います。

小さな小回りの利く政府の実現です。

官僚の方には不本意かもしれませんが、ぜひ実現してほしいですね。

小さな政府が実現できると、たとえば本に書いたように、ある期間ごとに首都を移すことも可能です。これはちょっと夢物語かもしれませんがね。

でも、ICTも交通網もこれからどんどん便利になります。いつかそうなるかもしれませんね。

国土交通省の方がまず理想の国の姿を描いて国民に提案して下さい。

『首都崩壊』に書いたような首都ができると、素晴らしいと思います。ぜひ、頑張ってください。

高嶋哲夫(たかしまつお)氏 プロフィール

1949 年 7 月 7 日 岡山県玉野市生まれ。
慶應義塾大学工学部卒業、大学院修士課程修了。
日本原子力研究所研究員を経て、カリフォルニア大学に留学。
日本推理作家協会、日本文芸家協会、日本文芸家クラブ会員

1979 年 日本原子力学会学会技術賞受賞
1990 年 『帰国』で第 24 回北日本文学賞受賞
1994 年 『メルトダウン』で第 1 回小説現代推理新人賞受賞
1999 年 『イントゥルーダー』で第 16 回サントリーミステリー大賞・読者賞をダブル受賞
2006 年 井植文化賞受賞
2007 年 『ミッドナイトイーグル』映画公開
2010 年 『風をつかまえて』が第 56 回読書感想文課題図書（高校生）に選定

著書

『M8』『虚構金融』『スピーカー原発占拠ー』『TSUNAMI（津波）』『都庁爆破！』『メルトダウン』『原発クライシス』『首都崩壊』『首都感染』『巨大地震の一日命を守るための本当のこと』ほか多数